

韓国語訳『源氏物語』における 解釈上の諸問題について

——『桐壺』巻(2)——

田 中 幹 子
金 智 慧

はじめに

本稿は『比較文化論叢』25号¹の続編である。本稿の体裁は前稿に従った。前稿追記したように、斐素演氏による『源氏物語』桐壺²訳が入手できたので、まず触れたい。

斐論文は、まず第一章に『源氏物語』における敬語の難しさについて謙讓語を中心に指摘し、日本古典文学全集³をテキストに現行の現代語訳を比較し示した後、第二章以降、桐壺巻の韓国語訳として自ら『源氏物語』桐壺⁴訳をした体裁となっている。しかし斐氏の桐壺訳は、原文を訳したのではなく、田訳をほぼそのまま踏襲していた。敬語翻訳に新しさが見られない以前に、田訳の誤訳もそのまま受け継いでおり、韓国語訳『源氏物語』の検討対象に値しないものとみなした。斐訳の具体的な問題点についてはまとめの項であげる。

前稿と同様、論文の見易さを考え任意で原文を区切り通し番号を付け、田溶新訳がもとにした日本古典文学全集、それを訳した田溶新訳、その両者を比較

-
- *1 拙稿「韓国語訳『源氏物語』における解釈上の諸問題について—『桐壺』巻(1)—」『比較文化論叢』25号(2010年12月)
 - *2 斐素演氏「源氏物語桐壺巻の韓国語訳の試み」(愛知学院大学大学院文学研究科文研会纪要 2009年3月)
 - *3 日本古典文学全集『源氏物語』阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注
 - *4 島津久基著『対訳源氏物語講話巻一』矢島書房 昭和5年11月、玉上琢弥著『源氏物語評釈第一巻』角川書店 昭和39年10月、今井忠義著『源氏物語 現代語訳一』桜楓社、昭和49年10月、新編日本古典文学全集『源氏物語一』小学館 平成6年3月)

した評、続いて瀬戸内寂聴訳とそれを訳した金蘭周訳、その両者を比較した評という形式をとっている。通し番号は前稿に続いた番号をつける。前稿同様、韓国中央大学校日本語学科の交換留学生だった金智慧氏との共著である。

—

15. 原文：御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙なき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。

口語：更衣のお部屋は桐壺である。帝が、多くの女御、更衣方のお部屋の前を素通りなさせて、ひっきりなしに桐壺にお出向きなさるので、その方々がやきもきなさるものなるほど無理ないことと思われる。

田訳：임금은 많은 여어와 강의들의 방을 그냥 지나치고 끊임없이 동호의 방만을 찾았으므로, 다른 여인들의 질투를 사는 것도 당연했다. 王はたくさんの女御と更衣達の部屋をそのまま通り過ぎて絶え間なく桐壺の部屋だけを訪れたので、ほかの女御達の嫉妬を買うのも当然だった。

評：「御局は桐壺なり」が省略。「見えたり」という語り手の推量が、語り手がおらず「当然だった」と断定している。

瀬戸内訳：更衣のお部屋は桐壺です。桐壺は帝のいつもおいでになる清涼殿から一番遠い位置にありました。帝が桐壺へお通いになる時には、多くの妃たちのお部屋の前を、素通りなさらなければなりません。それもひっきりなしにお通いになられるので、それを見て無視された妃たちが嫉ましく思うのも当然なことでした。

金訳：강의의 처소는 숙경사입니다. 숙경사는 폐하께서 늘 계시는 청량전에 서 제일 멀리 떨어진 곳에 있습니다. 폐하께서 숙경사로 걸음하려면 많은 후궁들의 방을 그냥 지나쳐 가야 하는데, 그것도 설새없이 오락가락 하는 터라, 무시당한 후궁들이 그 모습을 보고 원망하고 질투를 느끼는 것은 당연한 일이었지요.

更衣の処所は淑景舎です。淑景舎は陛下がいつもいらっしゃる清涼殿から一番遠い所にあります。陛下が淑景舎にいらっしゃるには多くの後宮の部屋を通り過ぎますが、それも絶え間なく行ったり来たりするので、無視された後宮達はその姿を見て恨み、嫉妬を感じるのは当

然なことでした。

評 : 桐壺を淑景舎と言い換えている。瀬戸内訳の影響で淑景舎の説明が入れている。この補入は、円地訳の「帝のお常御殿である清涼殿からは遠く離れた東北の隅に当たる。」を参考にしたと思う。また「心を尽くす」を瀬戸内訳は「嫉ましさ」とし、金訳ではさらに「恨み」を加えている。

16. 原文：参う上りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾たへがたくまきなきこともあり。またある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた、心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。

口語 : また更衣が御前に参上なさる場合にも、それがあまりたび重なる折々は、打橋や渡殿のあちこちの通り道に、たびたびけしからぬことをしかけては、送り迎への女房たちの着物の裾が台なしになって、がまんができぬというほどによからぬこともある。またあるときには、必ず通らなければならない馬道の両端の戸を閉めて更衣を閉じ込め、こちらとあちらとでしめし合わせて、進むも退くもできない思いをさせて困らせたりなさるときも多い。

田訳 : 또 동호가 임금 앞에 불려오는 경우가 너무 잦아지자, 여인들은 건물과 건물의 중간에 놓인 다리 [打橋] 며 건물 복도의 여기저기에 못된 짓을 해 놓아서, 동호를 배웅 하거나 마중하는 여인들의 옷을 망가뜨리는 등 참기 어려울 정도로 질투했다. 또 어느때는 서로들 미리 짜고, 지나가야 할 복도 양 끝의 문을 닫아서 오도가도 못하게 만들기도 했다.

また、桐壺が王の前に呼ばれてくる場合があまりにも頻繁になると、女人達は建物と建物の中に置かれた打橋と建物の廊下のあちこちに悪行をして置いて、桐壺を送ったり迎える女人達の服を駄目にするなど耐え難いほど嫉妬した。またある時はお互いに予め企んで、通り過ぎなければならない廊下の両端の扉を閉めて来る事も行くことも出来な

*5 円地文子訳『源氏物語一』新潮文庫 新潮社 平成二十年九月)

くさせた。

評 : 桐壺の女房達の裾が汚れて耐えがたいのを、桐壺に嫉妬した女人達が「嫉妬した」と主語を変えている。田訳では、「わづらはせたまふ時多かり。」が抜けており、嫉妬した女人達が出来なくさせたと能動態の訳となっている。韓国語が日本語ほど使役表現を使わないためであろう。

瀬戸内訳 : また、更衣が召されて清涼殿へ上がる時も、あまりそれが度重なる折々には、打橋や渡り廊下の通り道のあちこちに、汚いものなどを撒き散らし怪しからぬしかけをして、送り迎えのお供の女房たちの衣裳の裾が我慢できないほど汚され、予想も出来ないような、あくどい妨害をしかけたりします。 また時には、どうしてもそこを通らなければならぬ廊下の戸を、あちら側とこちら側でしめし合わせて閉ざし、外から錠をさして、中に更衣やお供の女房たちを閉じ籠めて恥をかかし、途方に暮れされるようなこともよくありました。

金訳 : 또 갱의가 천황의 부름을 받아 청량전으로 갈 때에도 횃수가 너무나 빈번하다 싶으면, 후궁들은 갱의가 지나가는 복도와 건물과 건물을 잇는 건널복도 여기저기에 오물을 늘어놓는 등 못된 짓거리를 해놓아 갱의가 거느린 궁녀들의 옷자락이 참을 수 없을 정도로 더러워 지는 예상치도 못할 해코지를 하였습니다.

또 때로는 반드시 지나가야 하는 복도의 문을 이쪽저쪽에서 꼭 닫고 밖에서 잠가버려, 갱의와 궁녀들이 안에 갇히는 수모를 겪는 일도 있었습니다.

また、更衣が天皇に呼ばれ清涼殿に行く時も回数があまりにも頻繁だと、後宮達は更衣が通る廊下と建物と建物を繋ぐ渡り廊下あっちこちに汚物を散らかす等、悪行をして置いて更衣が率いる宮女達の裾が我慢できないほど汚くなる思いがけない仕業をしました。 また時には必ず通るべきな廊下の扉をあっちこちで閉めて外でかけてしまい、更衣と宮女達が中に閉じ込められる侮辱をされることもありました。

評 : 「汚物を散らす」は、瀬戸内訳の「汚いものを撒き散らす」は円地訳の「不浄なものを撒き散らす」の影響を受けていると思う。また瀬戸内の「恥をかかし」も円地訳の「恥を見せ」を参考したことが想像され、それが金訳に影響し、原文にない「侮辱される」という表現が生

まれた。

17. 原文：事にふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるをいとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司をほかに移させたまひて、上局に賜す。その恨みましてやらむ方なし。

口語：何かにつけて、数えきれぬほどつらいことばかりが重なるので、更衣がひどく途方にくれているのを、帝はますます不憫なこととお考えになって、後涼殿にもとから局を持っておられる更衣の局をほかにお移しになって、そのあとを上局として下さる。その追われた更衣の恨みはほかの方々にもまして慰めるすべもなく深い。

田訳：그런 일이 있을 때마다 동호는 고통스러워 했다. 임금은 그것이 안쓰러워, 후량전 [後涼殿] 에 기거하는 다른 갱의들의 거처를 옮기게 하고, 그곳을 동호가 쓰도록 하였다. 쫓겨난 여인들의 원한은 말할 수 없이 컸다.

その度に、桐壺が苦しがあった。王はそれが痛ましいとおもって、後涼殿に起居するほかの更衣達の居所を移して、そこを桐壺が使うようにした。追い出された女人達の恨みはいい様がないほど大きかった。

評：田訳では「更衣達」と複数となっている。追い出された更衣の恨みが他の人々にまして大きいという内容だが、追い出された人が、ほかの人よりも恨は晴らしようがなかったことが把握できない。また上局を住居と訳している。

瀬戸内訳：こうして、何かにつけて、数えきれないほどの苦労が増すばかりなので、更衣はそれを苦に病んで悩みつづけ、すっかりふさぎこんでしまいました。それを御覧になると、帝はますます不憫さといとしさがつられるのでした。そこで、それまで後涼殿にお部屋をいただいでいて住んでいた、ひとりの更衣を外に移すように命じになり、そのあとを愛する更衣が清涼殿に召された時に使うようにしておしまいになりました。追われた更衣の身になれば、どんなに口惜しく、その恨みは晴らしようもなかったことでしょう。

金訳：이렇게 사사건건, 헤아릴 수 없을 만큼의 마음고생만 늘어나는 터라 갱의는 시름에 잠겨 마음의 병을 얻고 말았습니다. 천황은 그런

깡의의 모습을 보고는 더더욱 가엾게 여기는 마음과 사랑스러움이 깊어졌습니다. 그래서 끝내 그때까지는 후량전을 거처로 삼고 있던 깡의 한 명을 다른 곳으로 옮기라 명하고, 깡의가 청량전에 부름을 받았을 때 그곳을 사용하도록 하였습니다. 쫓겨난 깡의의 처지에서 보면 얼마나 분하고 원통한 일이었을까요.

こうやって事毎に、数え切れないほどの気苦労が増えるので更衣は愁いに沈んで心の病気を得てしまいました。天皇はそのような姿を見てはもっと可哀そうに思う心と愛しさが深まりました。それで遂にそれまで後涼殿を居所としていた更衣の一人を他の所に移すように命じて、更衣が清涼殿に呼ばれた時そこを使うようにしました。追い出された更衣の立場からみるとどんなに悔しくて怨めしいことだったでしょうか。

評 : 「あはれ」を、瀬戸内訳で「不憫さ」と「いとしさ」と繰り返したのを金訳は「可哀そうに思う心」と「愛しさ」と受けている。瀬戸内訳の「清涼殿に召されたときに使うように」という上局の説明をそのまま訳している。「まして」の訳を瀬戸内訳がしていないのを金訳も受けている。

18. 原文：この皇子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。

口語 : この若宮が三歳におなりの年、御袴着の儀式を、さきに一の宮がご使用になったものに劣らぬように、内蔵寮や納殿の財物をありたけ用いて、盛大にとり行わせられる。

田訳 : 황자가 세 살이 되던 해에, 남자용 치마를 입는 의식이 있었다. 먼저 행해졌던 제 1 황자의 의식에 뒤지지 않도록 내장료(内蔵寮)와 창고(納殿)에 있던 물건을 모두내어 성대하게 거행했다.

皇子が三歳になる年に、男用のスカートを着る儀式があった。先に行われた第一皇子の儀式に劣らないように内蔵寮と納殿にあった物を全

*6 田訳に次のような注がある。중무성(中務省)에 속하여, 보물과 헌상품 등을 관리했던 곳. 「中務省に屬して、宝物と献上品等を管理した所」。なお、前論文の「女御」に関しても田訳には、여어 : 임금의 부인 중에서 중궁보다 아래, 깡의보다 위인 신분. 「女御 : 王の婦人の中で中宮より下、更衣より上の身分。」がつけられている。

て出して盛大に行った。

評 : 「御袴着のこと」を「男用のスカートを着る儀式」と書いているが、説明が必要であろう。

瀬戸内訳 : この若宮が三つになられた年、御袴着の式がありました。先に行われた一の宮の式に劣らないよう、内蔵寮や納殿のすばらしい品々を、帝は惜しみなくお使いになり、それは立派になさいました。

金訳 : 어린 황자가 세 살이 되던 해, 처음으로 바지를 입히는 의식을 치렀습니다. 앞서 행제 1 황자의 의식에 못지않도록 천황은 내장료와 남전의 문을 열고 진귀한 물건들을 풀어 아낌없이 성대하게 의식을 치렀습니다.

幼い皇子が三歳になった年、初めてズボンを着る儀式をしました。先に行われた第一皇子の儀式に劣らないよう天皇は内蔵寮や納殿の扉を開き珍貴な物を広げて惜しみなく盛大に儀式を行いました。

評 : 金訳は、「ズボンを着る儀式」は「幼い子にズボンスカート形式の underwear を始めて着せる儀式。三歳から七歳の間に行われる。皇子の場合は天皇が腰の紐を縛ってあげる役割をする例が多かった。」と語句説明されている。これは、瀬戸内訳に付けられた「語句解説」の「袴着は かまぎ:初めて袴をつけるときのお祝いの儀式。三〜七歳の間に行う。皇子の場合は、天皇が腰結の役にあたることも多い。」による。

19. 原文 : それにつけても、世のそしりのみ多かれど、この皇子のおよすけもておはする御容貌心ばへ、ありがたくめづらかしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。

口語 : こうなされるにつけても、世間の非難がじつに多いけれども、この若宮のだんだんと成長なされるにつれてととのってゆくご容貌やご気性が、世にも類少なく珍しいほどにお見えになるので、どなたも徹底的に憎みとおすことがおできにならない。

田訳 : 이 때문에 많은 비난을 받았지만. 어린 황자가 점차로 성장함에 따라 세상에 유례가 없을 정도로 용모와 기상이 다듬어져 가서 누구에게도 심하게 미움을 사지는 않았다.

このために多く非難されたが、幼い皇子が次第に成長するにつれて世に類例がないほど容貌と気性が整えて行くので誰からもひどい憎しみ

を買うことはなかった。

評 : 「世の幾り」が省略され、呼応の副詞「え～ず」が訳に反映されていない。

瀬戸内訳 : それにつけても世間では、とかくの非難ばかり多いのに、若宮が成長なさるにつれ、お顔やお姿、御性質などが、この上なくすぐれていらっしゃるの、さすがのお妃たちも、この若宮を憎みきることができません。

金訳 : 그 일에 대해서도 이렇쿵저렇쿵 비난이 끊이질 않았으나, 어린 황자가 성장하면서 용모나 그 자태와 성품이 더할 나위 없이 훌륭하여 그악스런던 후궁들도 어린 황자를 미워하지는 못하였습니다.

そのことに関してもあれやこれやと批難が絶えなかったのですが、幼い皇子が生長しながら容貌とその姿態と気性が申し分なく立派であくどかった妃達も幼い皇子を憎めなかったです。

評 : 金訳も「世」が訳されていない。「めづらかしきまで見えたまふを」というのが「申し分なく」と敬語がない。「えそねみあへたまはず。」の主語が瀬戸内訳で「さすがの」、金訳で「あくどい」と脚色されている。

20. 原文 : ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かしたまふ。

口語 : ものの情理をわきまえていらっしゃる人は、このような方もこの世に生まれておいでになるものだったのだなと、ただ呆然と目をみはっておいでになる。

田訳 : 사물의 도리를 아는 사람이라면 이 세상에 이런 훌륭한 사람이 있을까 하고 망연해할 정도였다.

物事の道理をわきまえている人ならこの世にこのような立派な人がいるだろうかと呆然とするほどだった。

評 : 「出で」が田訳では訳されていない。

瀬戸内訳 : ましてものの情理をわきまえた人々は、これほど世にもまれなすぐれたお方さえこの世に現れることもあるのかと、茫然として目を見張っています。

金訳 : 하물며 정리를 아는 사람들은, 이렇듯 뛰어난 분이 이 세상에 있을 수 있을까 하고 망연히 바라볼 뿐이었습니다.

まして情理を分かる人達は、このように優れた方がこの世にいられるのかと呆然に眺めるだけでした。

評 : 瀬戸内訳が「まして」を挿入し、金訳が影響されている。

21. 原文：その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、(帝)「なほしばしこころみよ」とのみのたまはするに、

口語 : その年の夏、若宮の母君の御息所は、なんとなく健康をそこねて、養生のため里に下がろうとなさるが、帝はどうしてもお暇をお許しにならない。この何年かの間、常々ご病気がちでいらっしやっただので、それを帝はいつもごらんになっておられたから、「このままで、もうしばらく様子を見よ」とばかり仰せになるうちに、

田訳 : 그 해 여름 더없이 건강이 나빠진 동호는 친정으로 내려가기를 원했다. 그러나 임금은 이 몇 해 동안 갱의가 평소에도 병이 잦았다는 것을 알고, 그대로 좀더 상황을 두고 보자고 할 뿐, 친정에 가는 것을 허락지 않았다.

その年の夏、この上なく健康が悪くなった桐壺は実家に下がることを願った。しかし、王は 何年間更衣がふだん病気がちだったことを知って、そのまま状況を見ようというだけで、実家に行くのを許さなかった。

評 : 「はかなき心地にわづらひて」が「この上なく健康が悪くなった」と、最初から重症としている。また桐壺更衣が病気がちだったのに「御見慣れて」が省略されており、愛する人が重症なのに見殺しにしている帝ということになる。また帝の会話文が、説明文になっている。

瀬戸内訳：その年の夏、更衣ははっきりしない気鬱の病気になり、お里へ下がって養生なさりたいと願いましたが、帝は全くお暇を下さいません。ここ何年か、更衣はとかく病気がちでしたので、帝はそれに馴れきっておしまいになり、「もうしばらく、このままで様子をみよう」とおっしゃるばかりでした。

金訳 : 그해 여름, 마음의 병이 깊어진 갱의가 폐하게 사가로 나가 요양을 하고 싶다고 청하였으나 폐하게서는 허락하지 않았습디다. 지난

몇 년 동안 갱의가 몸져눅는 일이 잦았으므로 천황은 이미 익숙해져 이렇게 말할 뿐이었습니다. “잠시 용태를 두고 보십시오.”

その年の夏、心の病氣が深まった更衣が陛下に私家に出て療養をしたいと請いましたが、陛下はお許しになりませんでした。すぎた何年間更衣が寝込むことがしきりであったので天皇はもう慣れてこう言うだけでした。“すこし様態を見ましょう”

評 : 瀬戸内訳が「はっきりしない気鬱の病氣」としたのを金訳では「心の病氣」と精神の病として限定してしまい、心労からの病という印象とは異なる。

22. 原文：日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。

口語 : 日に日に重くなられて、わずか五、六日の間に、ひどく衰弱するので、更衣の母君が泣く泣く帝にお願い申しあげて、退出するようにお取り計らいになる。

田訳 : 그러던 중에 동호의 병세는 날마다 무거워졌다. 동호는 울면서 임금에게 애원하여 결국 퇴출하라는 명을 받았다. そうしている間に桐壺の病勢は日ごとに重くなった。桐壺は泣きながら、王に哀願して結局退出するという命を受けた。

評 : 「五六日のほどに」が省略。「母君」が桐壺更衣になっており、更衣自ら退くことを申し出たことになってしまう。

瀬戸内訳 : そのうち病状は日ましに重くなってゆき、ほんの数日の間に、めっきり衰弱なさり重態になりました。更衣の母君は泣く泣く帝にお願いして、ようやくお里へ下がるお許しをいただきました。

金訳 : 그러는 사이 상태는 날로 악화되어 갱의는 불과 며칠 사이에 눈에 띄게 쇠약해져 중태에 빠지고 말았습니다. 갱의의 어머니가 울음으로 폐하게 하소서하여 간신히 사가로 나갈 수있도록 허락을 받았습니다. そういううちに状態は日ごとに悪化され、更衣はわずか何日のうち目立つほど衰弱になり重態に陥りました。更衣の母親が涙で陛下に訴えようやく私家に出来るように許諾を受けました。

評 : 瀬戸内訳が「ほんの数日」と訳したため金訳も「わずか何日」としている。また瀬戸内訳が「ようやく」を挿入し、金訳もそれを受けている。

23. 原文：かかるをりにも、あるまじき恥もこそと心づかひして、皇子をばとどめたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。

口語：こうした折にも、あるべからざる不面目な事態になってはと用心して、若宮のほうは若宮にお残し申して、ひっそりとご退出になる。

田訳：만일의 사태를 우려하여 어린 황자는 궁중에 남겨둔 채로 동호는 사람 눈을 피해 물러나왔다.

万一の事態に恐れて幼い皇子は残したまま桐壺は人目を避けて退いてきた。

評：「かかるをりにも」が省略。また「あるまじき恥」を万一の事態と意識している。

瀬戸内訳：こういう場合にも、もしも退出の行列に何かひどい仕打ちをしかけられ、恥をかかされるようなことがあってはと取り越し苦労して、若宮は宮中に残されたまま、更衣だけがひそかに退出なさいます。

金訳：이때도 행여 퇴궁을 하는 행렬이 흉측한 일을 당하거나 수모를 당하는 일이 있으면 어쩌나 하는 노파심에 갱의는 어린 황자를 궁중에 남겨둔 채 혼자 몸으로 은밀히 궁중을 빠져나갔습니다.

この時も若しや退宮をする行列が陰険なことをされたり侮辱を受けることがあったらどうしようかという老婆心で更衣は幼い皇子を残したまま一人で忍んで宮中をすりぬけました。

評：「あるまじき恥」を瀬戸内訳が「もしも退出の行列に何かひどい仕打ちをしかけられ、恥をかかされるようなこと」と意識し、金訳も受け継いでいる。

24. 原文：限りあれば、さのみもえとどめさせあまはず、御覽じだに送らぬおぼつかさを言ふ方なく思ほさる。

口語：掟のあることだから、帝はそうそうもお引きとめになれず、ご身分がお見送りさえもあそばされぬ心もとなさを言いようもなく悲しくおぼしめす。

田訳：임금은 궐내의 규정상 동호를 붙잡을 수도 없었고, 배웅 할 수도 없었다. 다만 불안한 마음에 속으로만 슬퍼하였다.

王は宮中の規定上、桐壺を引き止めることも出来ないで、見送ることも出来なかった。ただ不安な心で心の中だけで悲しんだ。

評 : 見送りすることさえできない身分の高さのもどかしさを訳していない。何が不安なのかが理解できない。

瀬戸内訳 : 引き留めたくても宮中の作法によって限度があります。帝もこれ以上はどうにも止めようがなく、帝という立場から、見送りさえ思うにまかせない心もとなさを、言いようもなく辛くお感じになるのです。

金訳 : ㅁ뉵하고 싶어도 궁중의 법도에는 한계가 있습니다. 더 이상 막을 길도 없고 천황이라는 신분 때문에 배움조차 마음대로 할 수 없으니 폐하의 심경은 뭐라 말할 수 없이 답답하고 괴로웠습니다.

引き止めたくても宮中の法度には限界があります。もうこれ以上止める道もなく天皇という身分のせいで見送りさえ自由にできないので陛下の心境はなんとと言いようもなくもどかしくて苦しかったです。

評 : 瀬戸内訳で「引き留めたくても」と挿入されたのを金訳も受け継いでいる。

25. 原文：いとにほひやかに、うつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧するに、

口語 : じつにつやつやと美しくかわいらしく見える方が、すっかり面やつれて、まことにしみじみと世の悲しみを感じていながら、言葉に表わしてそれを申しあげることせず、人心地もなくうつらうつらしていらっしやるのをごらんになると、

田訳 : 윤기가 나고 귀엽던 동호의 얼굴은 심하게 야위어서 세상의 온갖 슬픔이 가득해 보였다. 살아 있다는 생각도 없이 멍하니 있는 동호의 모습을 보며,

つやがあり可愛かった桐壺の顔は酷く瘦せて世の中のあらゆる悲しみがあふれるばかりに見えた。生きているという思いもなく、ぼうっとしている桐壺の姿を見て、

評 : 「言に出でて聞こえやらず」が訳されていない。また「酷くやせて」は、儂い美とはならない。

瀬戸内訳 : もともと更衣は、たいそうつややかで美しく、可憐なお方だったのに、今はすっかり面やつれなさっています。心には帝とのお別れをたまらなくしみながら、それを言葉に出すこともできず、今にも消え

入りそうになっています。

金訳 : 강 의는 원래 용모는 가련하여도 피부에는 윤기가 흐르는 아름다운 분이었는데 지금은 훌쩍하게 야위고 초췌한 모습입니다. 마음은 폐하와의 이별을 견딜 수 없이 슬퍼하면서도 말할 기력도 없어, 금방이라도 목숨이 꺼져버릴 듯한 지경이었습니다.

更衣はもともと容貌は可憐でも肌は艶々する美しい方でしたが、今はげっそりし、やつれて憔悴した姿です。心は陛下との別れをたまらなく悲しみながらも言う気力もなく、いまでも命が消えるような生と死の境にいました。

評 : 金訳の「げっそり」という表現からは、はかない美しさは感じられない。

26. 原文 : 来し方行く末思しめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはすれど、御答へもえ聞こえたまはず。まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、われかのに気色にて臥したれば、いかさまにと思しめしまどはる。

口語 : 帝は、あとさきのご分別もおなくしになって、あらんかぎりのことを泣く泣くお約束あそばすけれども、更衣はお返事を申し上げることもおできにならない。まなざしなども、ひどくだるそうにしてふだんよりもいっそうなよなよと、正体もない有様で横たわっているから、帝はどうしたものかと途方にくれておいでになる。

田訳 : 임금은 앞뒤를 분별한 거를도 없이 가진 것을 모두 걸고 약속하였다. 동호는 눈초리도 흠어지고 기진한 모습으로 누워서 아무런 대답도 하지 못하였다. 임금은 그런 동호의 모습에 어찌해야 좋을지를 모르고 있었다.

王は前後のわきまえをする間もなく持っているものを全部かけて約束した。桐壺は目つきも散らばって気力が尽きた姿で横になって何の答えも出来なかった。王はそのような桐壺の姿で途方に暮れていた。

評 : 「来し方行く末思しめされず」という過去や将来に思いも及ばずの意が「前後のわきまえをする間もなく」とただ動揺している意になり、「よろづのこと」の内容が原文では「来世のこと」と想像されるのに、田訳では現在持っているものをすべてかけていると訳す。またすべてをかけて何を約束しているのか正体が分からない。

瀬戸内訳：それを御覧になると、帝は過去も未来も一切お考えになれず、ただもう、あれこれと泣く泣くお約束なさるのですが、更衣はもうお返事さえ出来ません。眠つきなどもすっかり弱々しく、いかにもはかなそうで、意識があるとも見えません。いつもよりいっそうよなよと横たわっていらっしゃるばかりでした。帝は御心痛のあまり気もそぞろで、なすすべもなく茫然としていらっしゃいます。

金訳：그 모습을 보니, 폐하께서는 앞뒤 분별없이 눈물로 이런저런 약속을 하는데, 갱의는 그에 대답조차 할 수 없었습니다. 맥 없는 눈길에는 한없는 슬픔만 담겨 있을 뿐, 의식이 있는지 없는지도 불분명하니, 여느 때보다 한층 가냘픈 모습으로 그저 누워 있을 뿐이었습니다. 천황은 비통한 마음에 어쩔 줄을 몰라 그저 망연히 바라만 볼 따름이었습니다.

その姿を見て、陛下は前後のわきまもなく涙であんなこんな約束をするに、更衣はそれに答えることさえできなかったです。元気がない視線には限りない悲しみだけもっているだけで、意識があるのかないのかも明らかではなくて、いつものより一層弱々しい姿でただ横たわっているだけでした。天皇は悲痛な気持ちでどうしたらいいかわからなく、ただぼんやりとながめるだけでした。

評：瀬戸内訳の「過去も未来も一切お考えになれず」を、金訳は「前後のわきまもなく」と訳した。この訳では来世を誓う内容という印象を与えない。

27. 原文：輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。

口語：輦車をお許しになる宣旨などを仰せ出されてからも、またお部屋にお入りになっては、どうしても退出をお許しに出来ない。

田訳：임금은 황족이 타는 손수레를 내어주라는 조칙을 내리고 나서도 방에 들어와서는 퇴출을 허가하지 않았다.

王は皇族が乗る輦車を出すという詔勅を下してから部屋に戻ってきては退出を許可しなかった。

評：「輦車」の説明が「皇族が乗る輦車」と加えている。「え〜ず」が訳されてなく、ただ「退出を許可しなかった」となっている。

瀬戸内訳：更衣のために、特別にて車をお許しになる宣旨をお出しになられて
からも、また更衣のお部屋に引きかえされて、やはりどうしても更衣
を手放すことがおできになりません。

金訳：갱의를 위해 특별히 손수레의 사용을 허락한다는 선지를 전하고도
갱의 방으로 돌아가 갱의 손을 잡고 놓지 못하였습니다。
更衣のために特別に手車の使用を許諾するという宣旨を伝えてからも
更衣の部屋に戻って更衣の手を繋いで放せなかったです。

評：輦車を瀬戸内訳が「更衣のために、特別に」と補入し、金訳がそれを受
けている。同じく瀬戸内訳で「帝が更衣を手放せなかったと」と補
入し、金訳でも入れている。

28. 原文：「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりと
もうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいといみじと
見たてまつりて、

口語：「決められている死出の道にも、いっしょにと、お約束なされたでは
ないか。いくらなんでも、私を残してはゆけますまいね」と仰せにな
るのを、女も帝のお気持ちをほんとおいたわしくと存じあげて、

田訳：「전세의 인연으로 죽음의 길이라도 같이 가기로 약속을 하지 않았소.
이렇게 나를 두고는 가지 못하리.” 동호도 임금의 마음이 정말로
안되었다는 것을 알고 숨이 넘어갈 듯 간신히 말했다.
「前世の因縁で死の道でも一緒に行こうと約束したじゃないですか。
こう私を置いて行けますまい。桐壺も王の気持ちが本当に気の毒だ
ということを知り、息を引き取りそうにかろうじて言った。

評：「前世の因縁で」が加わっている。現代語訳の「決められている」に
引っ張られたかと思われるが、前世の因縁で約束したという意味のと
れない文脈となっている。⁷

瀬戸内訳：「死出の旅路にも、必ずふたりで一緒にと、あれほど固い約束をし
たのに、まさかわたしひとりをうち捨てては、去って行かれないでし
ょう」と、泣きすがり仰せになる帝のお心が、更衣にもこの上なくお

*7 日本古典文学全集の注ではこの部分「限りあらむ道」は、前世の因縁で、その時期も定
められている死出の道。にもかかわらず「後れ先立たじ」と約束が交された、それほど帝と
更衣とは無類の仲だったのである。」とあり、これを参考にしたのか。

いたわしく切なくて

金訳 : “죽음의 길까지 같이하자고 그토록 굳은 약속을 하였건만, 설마 나를 혼자 내버려두고 가지는 못하시겠지요.” 이렇게 울며 매달리는 폐하의 모습에 갱의 또한 마음이 아프고 애뜻하여 숨이 끊어질 듯 겨우 이렇게 말하였습니다.

『死ぬ道まで一緒にいようとあれほど固く約束をしたのに、まさか私を一人にほったらかして行ったりはできませんでしょう』こう泣きながらすがり付く陛下の姿に更衣もまた心が痛く切なくてたえだえにこう言いました。

評 : 瀬戸内訳が「泣きすがり仰せになる帝」を金訳でも受け継ぎ、さらにすがり付く陛下と脚色されている。

29. 原文: 「かぎりとして別る道の悲しきにかまほしきは命なりけりいとかく思ひたまへましかば」

口語 : かぎりとして…… (いまは、そうよりほかなく別れることになっている死別の道が悲しく思われますにつけて、私の行きたいのは生きる道のほうでございます) ほんとに、このようなことになろうとかねて存じ寄りましたなら

田訳 : “<지금은 어쩔 수가 없어 사别的 길이 슬퍼지지만, 정말 원하는 것은 사는 길입니다.> 정녕 이렇게 될 것을 전부터 알고 있었다라면.”
今はしようがなく死別の道が悲しくなりますが、本当に望むのは生きる道です。

『ほんとうにこのようになることを前からしっていたなら』

評 : とくに大きな問題はない。

瀬戸内訳: 今はもうこの世の限り／あなたと別れひとり往く／死出の旅路の淋しさに／もっと永らえ命の限り／生きていたいとおもうのに「こうなることと、前々からわかっておりましたなら」

金訳 : 이제는 이 세상의 끝 / 당신과 헤어져 홀로 가는 / 죽음의 길의

*8 田訳では、「일본 전통 화가 (和歌) 로 五—七—五—七—七의 운율을 띤다. 이런 화가 가 이 책에 795수 나온다. 화가는 <> 표시로 앞뒤를 구별하였다. 번역은 阿部、秋山、今井의 現代日本語譯을 참고로 했다.」 「日本伝統和歌で五—七—五—七—七の韻律を帯びる。このような和歌がこの本に795首出る。和歌は<>表示で前後を区別した。翻訳は阿部、秋山、今井の現代日本語訳を参考にした。」

瓮々함이여 / 오래도록 이 목숨 다할 때까지 / 살고 싶었건만 “이렇게 될 줄 진작 알았더라면.”

いまはこの世の果て / あなたと別れ一人で行く / 死の道の寂しさよ / 長らくこの命果てるまで / 生きていたかったのに 『こうなると早くから分かってたなら』

評 : 「悲しき」を瀬戸内訳が「淋しさ」と訳したので、金訳が受け継いでいる。しかしこれでは、桐壺更衣の悲痛な思いを伝えきれない。この歌は、生きる道、死ぬ道の分かれ道に立ち、死ぬ道を歩まなくてはいけないのはわかっているが、本当に選びたいのは、生きる道だという激しい生への執念が込められた歌である。瀬戸内訳では、半ば諦念している歌という印象を受け、それをそのまま金訳が受け継いでいる。また、「ましかば」の反実仮想の意味が訳されていないのは、反実仮想を現代語や韓国語に訳しづらかったからであろう。

30. 原文：と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむ、と思しめすに、「今日はじむべき祈禱ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。

口語 : と息もたえだえで、申しあげたいことはあるらしい様子であるが、ひどく苦しそうで見るからにぐったりしているので、帝はいっそのままで、どうあろうとこうあろうとなりゆきを見届けたいとおぼしめすのに、「今日から始めることになっております数々の祈禱を、しかるべき験者の人々が仰せつかっております、それを、今晚から始めますので」と、せきたて申しあげるので、帝はたまらないことをとおぼしめしながら、更衣を退出させておやりになる。

田訳 : 동호는 임금에게 더 할말이 있는 듯 하였으나, 말을 계속하기에는 너무 고통스러워 보였다. 임금은 차라리 이대로 어떻게 되든지 동호의 모습을 계속 지켜보기를 원했다. 그러나 동호가 그날 저녁부터 기도를 잘 하는 수도자들에게 일러두었던 것을 시작하겠다고 재촉하자, 임금은 동호의 퇴출을 허락하였다.

桐壺は王に残った言葉があるようだったがいい続けるにはとても苦し

く見えた。王はいっそどうなろうと、桐壺の姿をずっと見守ることを望んだ。しかし、桐壺がその日の夕べから祈禱が上手な修行者に言い付けて置いたのを始めると催促すると、王は桐壺の退出を許した。

評 : 田訳では桐壺更衣が「宮中からの退出」をせきたてたことになり、原文と大きく違う。会話文が説明文になっている。「わりなく思ほしながら」が訳されていない。

瀬戸内訳 : 息も絶え絶えにやっとそう口にした後、まだ何か言いたそうな様子でしたが、あまりの苦しさに力も萎え果てたと見え言葉がつづきません。帝は分別も失われ、いっそのままここに引き留め、後はどうなろうと、最後までしっかり見とどけてやりたいとお思いになるのでした。ところが傍から、「実は今日から始めることになっていた御祈禱の支度を整えまして、効験あらたかな僧たちが、もうすでに里の方で待っております。御祈禱は今夜からでして」と、申し上げ、しきりにせかせますので、帝はたまらないお気持ちのまま、今はどうしようもなく退出をお許しになりました。

金訳 : 그러고는 다시 무슨 말인가 하고 싶은 듯하였으나 갱의는 힘겨움에 말을 잊지 못하였습니다. 천황은 끝내 분별력을 잃고, 나중 이야기 어떻게 되든 차라리 이대로 곁에 두고 마지막까지 지켜보고 싶은 마음이 들었습니다. 그러나 옆에서 이렇게 채근하는 것이었습니다. “실은 오늘부터 시작하기로 한 기도의 준비가 다 갖추어져, 신통력이 있다는 스님들이 벌써 사가에서 기다리고 있습니다. 기도는 오늘 밤부터이오니.” 이에 천황은 가누지 못하는 마음으로 어쩔 수 없이 퇴궁을 허락하였습니다.

そう言っではまた何か言いたいことがあるように見えたが、更衣は苦しさに言い続けなかったです。天皇は遂に分別力を失い、後のことはどうなろうといっそのままそばに置いて最後まで見守りたい気持ちになりました。しかし傍でこうせきたてるのでした。『実は今日から始めるようにした祈禱の準備が整えて、神通力があるという坊さん達がもう私家で待っております。祈禱は今夜からなので。』それで天皇は整理がつかない気持ちで仕方なく退宮を許しました。

評 : 文章順が多少違う程度である。

31. 原文：御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。

口語：帝は胸がいっぱいになって、とろりともおやすみになれず、短い夏の夜の明けるのを待ちかねておいでになる。

田訳：임금은 가슴이 미어져서 한숨도 잠을 못 잤다.
王は胸が裂けるようになって一息も眠れなかった。

評：やや省略しているが、特に問題ない。

瀬戸内訳：帝はその夜は淋しさと不安でお心がふさがり、まんじりともなさらず、夜を明かしかねていらっしかったです。

金訳：천황은 그날 밤, 외로움과 불안함에 가슴이 먹먹하여 한시도 눈을 붙이지 못하고 밤을 꼬박 새웠습니다.

天皇はその夜、淋しさと不安さに胸が詰まってひと時もまどろめず、夜を明かしました。

評：瀬戸内訳の脚色をそのまま金訳を受け継いでいる。

32. 原文：御使の行きかふほどもなきに、なほいふせさを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使も、いとあへなくて帰り参りぬ。

口語：まだお見舞のお使いが行って帰参するだけの時間もたないのに、それすらもうたまらなく気がかりでならぬお気持を仰せになっておられたが「夜中を過ぎるころに、とうとうお亡くなりになりました」と言って更衣の里の者が泣き騒ぐので、お使いもまったくがっかりして宮中に帰参した。

田訳：심부름 하는 이를 시켜 문안을 보내 놓고, 돌아올 시간이 아직 멀었는데도 그 사이를 기다리지 못하고 안절부절못했다. “밤중에 돌아가셨습니다.” 동호 집에 있는 사람이 흐느끼며 전하는 소리에 심부름 왔던 사람은 낙담하여 궁중으로 돌아왔다.

お使いするものをさせて見舞いを送っておいて、戻ってくる時間がまだ遠いのにその間を待たずに居ても立ってもいられなかった「夜中にお亡くなりました。」と、桐壺は家にいる人がすすり泣きながら伝える声にお使いに行った人は気落として宮中に戻ってきた。

評：「なほいふせさを限りなくのたまはせつるを」、「なむ」が訳されていない。

瀬戸内訳：お里へお見舞いやられたお使いが、まだ帰ってくる時刻でもないのに、気がかりでたまらないと、しきりに話していらっしゃいました。更衣のお里では、「夜なかすぎに、とうとうお亡くなりました」と、人々が泣き騒いでいるのを聞き、勅使もがっかり気落ちして、宮中へもどってまいりました。

金訳：깡의 사가로 보낸 칙사가 아직 돌아올 시각도 아닌데, 마음이 쓰여 견딜 수가 없다고 몇 번이나 말씀하셨습니다。 깡의 사가에 도착한 칙사는 사람들이 울며 슬퍼하는 소리를 들었습니다. “한밤이 지나 끝내 돌아가셨습니다。” 이 말을 들은 칙사는 낙담하여 궁중으로 돌아왔습니다。

更衣の私家に送った勅使がまだ帰ってくる時刻でもないのに、気がかりでいられないと何度もおっしゃいました。更衣の私家に着いた勅使は人々が泣き悲しむ声を聞きました。「一夜過ぎて遂にお亡くなりました。」このことを聞いた勅使は落胆して宮中に戻ってきました。

評：特に問題なし。

33. 原文：聞こしめす御心まどひ、なにごともしめし分かれず、籠りおはします。

口語：この知らせをお聞きになられる帝の動転するお気持、もうなんのご分別もつかぬ体で、ただお部屋に閉じこもっておいでになる。

田訳：그 소식을 들은 임금은 너무 놀라서 정신을 가누지 못하였다. 아무 분별도 못한 채 그저 방에서만 지냈다.

その消息を聞いた王はあまりにも驚いて精神を整えられなかった。なんの分別も出来ず、ただ部屋で過した。

評：特に問題なし。

瀬戸内訳：それをお聞きになった帝は、御悲嘆のあまり茫然自失なさり、お部屋に引き籠っておしまいになります。

金訳：천황은 그 소식을 전해 듣고는 비탄에 겨운 나머지 망연자실하여 방에 은둔하고 말았습니다.

天皇はその消息を伝えて聞いては悲嘆に暮れたあまりに茫然自失して部屋に籠ってしまいました。

評：瀬戸内も金も「何ごともしめしわかれず」に悲嘆と茫然自失した感

情まで挿入している。

34. 原文：皇子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかるほどにさぶりら
ひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなむとす。

口語：若宮をば、このまま宮中にとどめてごらんになっていたいと、帝は強く願われるけれどもこうした母君の喪中に、宮中においでになるのは前例のないことであるから、退出なさろうとする。

田訳：임금은 황자를 궁중에 머물게 하고 싶었으나, 어머니의 상중에 황자가 궁중에 남아 있는 것은 전례에 없던 일이었다.
王は皇子を宮中に居着かせたかったが、母親の喪中に皇子が宮中に残っているのは前例に無いことだった。

評：「まかでたまひなむとす」が省略されている。

瀬戸内訳：こうした中でも、若宮をそのままお側に引きとめて、お顔をごらんになっていたとお思いになりますけれど、母の喪中に若宮が宮中にいらっしゃるのは、前例のないことなので仕方なく若宮も里方へ御退出になります。

金訳：그런 와중에도 어린 황자를 곁에 두고 얼굴이나마 보고 싶다고 생각하나 어머니의 상중에 황자가 궁중에 있는 것은 전례가 없는 일이라 어쩔 수 없이 어린 황자를 사가로 내보냈습니다.
そんな中でも幼い皇子を傍において顔だけでも見たいと思うが、母親の喪中に皇子が宮中に居ることは前例がないことだったので仕方なく幼い皇子を出しました。

評：特に問題なし。

35. 原文：何ごとかあらむとも思したらず、さぶらふ人々の泣きまどひ、上も御涙の隙なく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを。

口語：若宮は、どれほどのことが起きたのかともわかっておいでにならず、おそばの人々が泣きまどい、帝もとめどなく落涙しておいでになるのを、不審なことに眺めていらっしゃることである。

田訳：어린 황자는 어떤 일이 벌어졌는지도 모르고, 사람들이 울부짖고 하염없이 눈물을 흘리는 것을 이상한 눈으로 바라보았다.

幼い皇子はどんなことが起きたのかが分からずに、人々が泣き叫びて

止めどなく涙を流すのを不思議な目で眺めた。

評 : 帝がとめどなく涙を流すのであるが、田訳では人々になっている。

瀬戸内訳 : 若宮はまだ頑是なくて、何がおこったのかお分かりにならず、女房たちが泣きまどい、帝までしきりに涙を流されるのを、不思議そうに眺めていらっしゃいます。

金訳 : 어린 황자는 아직 철이 없어 무슨 일이 벌어졌는지도 모르고, 울부짖는 궁녀들과 하염없이 눈물만 흘리는 폐하를 이상한 눈으로 바라보았습니다.

幼い皇子はまだ物心が付いてなく何の事ができたのかも分からず、泣き叫ぶ宮女達と止めどなく涙だけ流す陛下を不思議な目で眺めました。

評 : 光源氏が「何ごとがあらむとも思したらず」な原因を瀬戸内訳で「頑是がなくて」と入れたのを金訳でも「物心が付いてなく」と受け継いでいる。また金訳では「涙だけ」と限定表現がされている。

36. 原文 : よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。

口語 : 尋常普通の場合であっても、母との死別の悲しからぬはずはないことだのに、いまはなおさら身にしてみても哀れで、何とも言いようのない有様である。

田訳 : 사람들은 어머니와 사별한 어린 황자를 바라보며 말로 표현할 수 없는 안타까움을 느꼈다.

人達は母親と死別した幼い皇子を眺めて言葉には表現できない切なさを感じた。

評 : 「よろしきことだに」が訳されていなく、また切なさの原因が皇子の幼さ故ということになっている。

瀬戸内訳 : 普通のありふれた親子の別れでさえ悲しいものなのに、まして母君との死別さえわきまえない若宮の哀れさはひとしおで、ことばもありません。

金訳 : 평범한 부모 자식 간의 이별이라도 슬프디 슬픈 법인데, 하물며 어머니와 사별한 것을 미처 알지 못하는 어린 황자의 가없음은 이루 말할 수가 없었습니다.

平凡な親子間の離別も悲しく悲しいものなのに、まして母親と死別したのをまだわからない幼い皇子の労しさはどうていい様がありませんでした。

評 : 「よろしきこと」が身分から解釈されている。

37. 原文：限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなむと泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に、慕ひ乗りたまひて、愛宕といふ所に、いとかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけむ。

口語 : きまりもあることなので、作法どおりご葬儀を行うのだが、母北の方は、娘の亡骸を焼くと同じ煙となって空へのぼってしまいたいと泣いてお慕いになって、ご葬送の女房の車に後を追いかけてお乗りになって、愛宕という所で、まことに厳肅にその儀式を行なっているところに到着なさったときのお気持は、どんなに悲しくていらっしゃったであろうか。

田訳 : 슬픔에는 한이 없었으나, 장례에는 일정한 법도가 있었다. 장례는 애당(愛宕)이라는 장소에서 엄숙하게 거행되었다. 동호의 생모는 딸의 시신을 태우는 불에 같이 태워져 연기가 되겠다고 울부짖었다. 悲しさには限りがなかったが、葬礼には一定な法度があった。葬礼は愛宕という場所で厳肅に行われた。桐壺の生母は娘の死身を燃やせる火と一緒に燃えられて煙になると泣き叫んだ。

評 : 「限りあれば」の前に「悲しさには限りがなかったが、」が加えられている。また、母が葬儀が行われる最中に泣き叫んでるように表わしている。

瀬戸内訳 : いくら名残を惜しんでも、こうした時の掟には限りがありますので、更衣の亡骸はやがて作法通りに火葬にされることになりました。母君は、娘と同じ煙になって、空へ上りかき消えてしまいたいと泣きこがれ、野辺送りの女房の車に追いつがるようにして乗りこみました。愛宕の火葬場で、実におごそかに葬儀をとり行っている最中にやっとたどり着かれたその心のうちは、一体どんなだったことでしょう。

金訳 : 아무리 아쉽고 미련이 남아도, 이런 때의 법도에는 한도가 있는지라 갱의의 주검은 예법대로 화장을 하게 되었습니다. 갱의의 어머니는

쓰러져 울다가, 딸과 함께 연기가 되어 하늘로 사라지고 싶다면 화장터로 가는 시녀들의 수레에 매달리듯 올라랐습니다. 오타기의 화장터에서 한참 엄숙하게 장례 의식이 거행될 때야 겨우 도착한 어미의 마음속이 과연 어떠하였을까요.

どんなに残り惜しく未練が残っても、このような時の法度には限度があるので更衣の亡骸は礼法通りに火葬をすることになりました。更衣の母親は倒れて泣いては、娘と一緒に煙になって空に消えたいと火葬場に行く侍女達の車にすがり付くように乗り込みました。愛宕の火葬場で一頻り厳かに葬礼儀式が行われる時にやっと着いた母親の心の中はどうだったのでしょうか。

評 : 「いくら名残惜しんでも」が補入し金沢がそれを受けている。また、作法に火葬の言葉を入れて説明している。

38. 原文 : 「むなしき御骸を見る見る、なほおはするものと思ふが、いとかなければ、灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人とひたぶるに思ひなりなん」と、さかしのたまひつれど、車よりも落ちぬべうまるびたまへば、さは思ひつかしと、人々もてわづらひきこゆ。

口語 : 「むなしい御遺骸を目の前に見ながらも、やはりまだこの世に生きていらっしやるように思われて、それがどうにもならないのですから、灰におなりになるところを拝見して、いまこそこの世に亡き人だと、すっかり諦めをつけてしましましょう」と、健気におっしゃったけれども、そのときになると車から落ちてしまいそうにお倒れになるので、こんなことにおなりであろうと思ったのだと、人人がお相手をしかねている。

田訳 : 그러다가는 이윽고 담담한 목소리로 말했다. “허무한 시신을 눈앞에 보면서도 아직도 동호가 이 세상에 살아 있는 것 같았는데, 재가 되는 것을 보니 이제사 체념이 되는군요.” 그러나 결국 쓰러져서 수레에서 떨어질 뻔하는 그녀의 모습을 보면서 사람들은 몹시 걱정을 하였다.

そうしては、やがて淡々な声で話した。「空しい死身を目の前にしながらも未だに桐壺がこの世に生きているようだったのに、灰になるの

を見て今になって諦念できますね。」と言った。しかし、結局倒れて車で落ちそうになる彼女の姿を見て人達は大変心配をした。

評 : これから灰になるのを見てあきらめをつけようという部分が、田訳では灰になるのを実際見て諦めたとなっている。「さかしう」を「淡々」と異なる意に訳になっている。また、倒れて車から落ちそうになったのは葬式の前に起った事なのに、順序が逆様になっている。

瀬戸内訳 : 「むなしい亡骸を目の前にしながら、やはりまだ生きていられるとうにしか思えないのが、いかにも辛いので、いっそ灰になられるのをこの目でたしかめて、今こそほんとうに亡くなったのだと、ひらすら思いましょう」と、賢しそうに言われたのに、途中、車からも転び落ちそうなほど、泣いて身を揉まれるので、たぶんこんなことと思ったと、女房たちも介抱しかねて困りはてました。

金訳 : “허망한 주검을 이 두 눈으로 보았으면서도 아직도 살아 있는 듯 여겨지는 이 마음 얼마나 괴로운지, 차라리 재가 되는 것을 확인하여 정말이지 이제는 죽었다고, 그렇게 생각해야겠지요.” 이렇게 말은 현명하게 하나, 가는 도중 수레에서 굴러 떨어질뻔할 정도로 울며 몸부림치는 어머니의 모습에, 시녀들은 이럴 줄 알았다면서 어떻게 달래야 좋을지 난감해하였습니다。

「虚妄な亡骸をこの二つの目で見ながらも未だに生きているように感じるこの心いかに辛いのか、いっそ灰になるのを確認して本当に今は死んだと、そう思うべきでしょうね」こう話すのは賢明にするが、行く途中に車で落ちそうになるくらい泣きあがく母親の姿に、侍女達はどうなると分かったと言ってどう慰めたらいいのか困り果てました。

評 : 瀬戸内訳では「泣いて身を揉まれるので」が補入され、金訳では「泣きあがく母親の姿に」が追加されている。

39. 原文 : 内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。

口語 : 宮中からお使がある。三位の位を追贈あそばす旨、勅使が見えて、その宣命を読むのは悲しいことであった。

田訳 : 칙사가 와서 궁중에서 삼위 (三位) 의 지위를 추증한다며 선명체 (宣明體) 로 쓴 문서를 읽었다. 슬픈일이였다. (* 10 田訳には「정사위

상이었던 鞆の義に 종삼위를 추증했다」正四位上だった更衣に従三位を追贈した。)

勅使が来て宮中で三位の地位を追贈すると宣命体で書かれた文書を読んだ。悲しいことだった。

評 : 宣命体の「みょう」の字が間違っている。

瀬戸内訳 : 宮中から勅使が見えました。亡き更衣に三位の位を贈られるとの宣命を読みあげるのが、いっそう悲しみを誘うのでした。

金訳 : 궁중에서 칙사가 나왔습니다. 죽은 鞆의에게 3 位の 품계를 내린다는 선명을 읽어내리자 슬픔이 한결 더하였습니다.

宮中で勅使が出ました。死んだ更衣に三位の品階を下すという宣命を読み出すと悲しさが一層増しました。

評 : 特になし。

40. 原文 : 女御とだに言はせずなりぬるが、あかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと、贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。

口語 : 生前、女御とさえも呼ばせぬままに終わってしまったことが、じつに心残りなこととおぼしめされるので、せめてもう一階上の位をだけでもというお気持ちで、お贈りになるのであった。このことにつけてもまた、故人をお憎みになる人々が多い。

田訳 : 여어라고도 부르지 못하였던 것을 애석하게 여겨 한 단계 위의 지위만이라도 주고 싶은 임금의 마음이었다. 이 일로도 고인은 여러 사람에게 원성을 샀다.

女御とも呼べなかったのを愛惜に思い、一段階上の地位だけでもあげたい王の気持ちだった。このことでも故人は多数の人から怨声を買った。

評 : 特になし。

瀬戸内訳 : 生前、女御とも呼ばせずに終わったのを、帝はいかにも残念で口惜しくお思いになりせめてもう一段上の位だけでもと贈られたのでした。このことで、また更衣を憎むお妃たちが多いのでした。

金訳 : 그녀가 살아 있을 때, 여어라 불러주지 못했던 것을 못내 아쉽고 분하게 생각한 친황이 한 단계나마 지위를 올려주고자 내린

선명이었습니다. 허나 이 일로 갱의를 새삼 미워하는 후궁들이 많았습니다.

彼女が生きていたとき、女御と呼んであげられなかったことを果てしなく惜しくて悔しく思った天皇が一段階でも地位を上げようと下した宣命でした。しかしこの事で更衣をあらためて憎む妃達が多かったです。

評 : 瀬戸内訳では「いかにも残念で」が補入され、金訳がそれを受けている。

41. 原文：もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞ思し出づる。

口語 : しかし、ものの情理をよくわきま知っておられる人は、更衣の姿や顔だちの美しかったことや、気だてが穏やかで難がなく、憎もうにも憎めなかったことなどを、亡くなったいまとなってはじめてお思い起こしになる。

田訳 : 그러나 사리를 잘 알고 있는 사람은 동호의 용모가 아름답고, 성질이 온순하면서 무난하여 미워도 미워할 수 없음을 죽은 후에나마 깨닫고 있었다.

しかし、事理をよくわかっている人は桐壺の容貌が美しく、性質が温順で無難なので憎んでも憎めないのを死んでからでも悟っていた。

評 : 特になし。

瀬戸内訳 : そんな中でも、さすがにものの情理をわきまえた人々は、亡き人の顔だちや姿のやさしく美しかったこと、心ばえがおだやかで角がなく、憎めなかったことなどを、今更のように思い出します。

金訳 : 그런 가운데에서도 과연 세상의 도리를 아는 사람들은, 고인의 아리따운 용모와 온화하고 모나지 않았던 성품을 미워할 수는 없다고 새삼스럽게 생각하였습니다.

そんな中でもさすが世の中の道理が分かる人達は、個人の美しい容貌と温和で角がなかった性品を憎むことはできないと今更思いました。

評 : 瀬戸内も金も「そんな中でも、さすがに」が補入されている。

42. 原文：さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人からのあはれに、情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。

口語 : 見苦しいほどの帝のご寵愛ぶりのためにこそ、冷やかな態度でお嫉みになったのであるが、人柄が優しく情愛の深かったお心を、上の女房なども、みなが思い出し恋しく思った。「なくてぞ」というのは、こんな場合のことを詠んだものであろうかと思われた。

田訳 : 눈에 거슬릴 정도로 지극하던 임금의 사랑을 냉랭하게 질투하던 여인들도 동호의 인품이 우아하고 정이 깊었던 것을 그리워하고 있었다. ‘죽으면’ 이라는 노래는 이런 마음을 읊은 것인 듯 싶었다. 目に障るほど至極だった王の愛を冷々に嫉妬していた女人達も桐壺の人柄が優雅で情け深かったことを懐かしく思った。「死ねば」という歌はこのような心を詠んだようだった。

評 : 「上の女房なども」が単純に「女人」となっており、女房だけではなく、他の妃達も含めたような印象を受ける。田訳「死ねば」の訳では、歌の意図が伝わらない。

瀬戸内訳 : 帝の苦しいまでの度をこした更衣への御寵愛のせいで、いじめたり、嫉んだりしたもの、更衣の人柄のしみじみ情愛深かったのを、帝のおそば付きの女房たちも、恋しく思いだしてはなつかしんでいます。 <亡くてぞ人は恋しかりける>という古歌は、こうした折にこそふさわしいように思われます。

金訳 : 천황 곁에서 시중을 드는 궁녀들도, 눈에 거슬릴 정도로 지극한 폐하의 사랑 탓에 몹쓸 짓을 하기도 하고 질투도 많이 하였으나 정이 많았던 갱의의 인품을 떠올리며 그리워하였습니다. ‘죽은 후에야 그 사람이 이리도 그리워지구나’ 란 옛 시는 이런 때에 딱 어울리는 것이라 생각됩니다.

天皇の傍で世話をする宮女達も、目に障るほど至極な陛下の愛のせいで性悪のことをしたり嫉妬もたくさんしたが情深かった更衣の人柄を思い浮かべると懐かしく思いました。「死んだ後になってからその人がここまで懐かしくなることか」という昔の詩はこのような時にぴったり合うものと思われます。

評 : 「すげなうそねみたまひしか」を瀬戸内訳が「いじめたり」と訳しているため、金訳でも「性悪のことをしたり」と訳している。

結び

以上、一文ずつ、田訳と金訳をそれぞれ、日本古典文学全集と瀬戸内寂聴訳を比較した。田訳が、応応にして、主語が変わり、原文を省略することがあるのは、前稿で既に指摘したとおりである。今回さらにあらためて気付いた点は、重訳の危うさである。瀬戸内訳は、小説家魂ゆえか原文を物語として盛り上げようと思うあまり原文にない副詞を多用しがちであることがわかる。また、わかりやすく伝えようとする意識のあまり主語や目的語を特定し、また原文にはない具体的な描写を書き加えている。それを金訳がそのまま受け継いでいるのである。よって、あたかも伝言ゲームのように原文が少しずつ脚色されてしまった。

最後に冒頭に指摘した斐訳についてふれたい。紙面の都合上、一つ一つ田訳を重ねて掲出することができないので1点のみ指摘する。斐訳はその訳すべてが田訳に酷似しており、例えば本稿でとりあげた田訳の最も大きな誤訳箇所である22番の桐壺更衣の母が娘を里に帰してもらうのを願っている部分を更衣自身が申し出るという訳になっており、これが「22. 그러던 중에 동호의 병세는 날마다 무거워 졌다. 동호는 울면서 임금에게 애원하여 결국 퇴출하라는 명을 받았다.」斐訳もまったく同じなのである。非常に遺憾であるが、斐訳は原文は勿論、日本語の現代語訳を基にしているのでもなく田訳を重訳しているものといえる。

*9 金訳における重訳の問題点については、拙稿「金蘭周訳『源氏物語』から見る現代語訳『源氏物語』の問題点について—「若紫」「紅葉賀」—」(札幌大学総合論叢 第31号 2011年3月)